

で平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006~2009

課題番号：18520089

研究課題名（和文）古典的文芸作品にみられる音感覚についての比較美学的研究

研究課題名（英文）Comparative Aesthetic Study on the Sound-Hearing found in Japanese Classical Literature

研究代表者

原 正幸（HARA MASAYUKI）

広島大学・大学院総合科学研究科・教授

研究者番号：10092305

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：音感覚、自然音、聴覚世界、文芸的美意識。

1. 研究計画の概要

(1) ①日本の主要な古典的文芸作品の原典校訂版を購入し、音感覚史上特筆されるべき「源氏物語」（全編）と芭蕉の作品（全発句および「奥の細道」）を中心に、音感覚と関わりのある箇所を原典に即して精査し、資料化する。

② ①の資料に基づいて、そのような音感覚がどのようにして成立し得たか、を比較美学的に解明することを目指す。その際、可能な限り中国古典文学の場合との比較を試みる。

(2) ①「奥の細道」の中核部分（松島—酒田）の主要地点（松島、平泉、立石寺、最上川、出羽三山、象瀧）を 3 年計画で実地調査して地理的環境を確認し、芭蕉の時代の聴覚世界を推測する手掛りを得る。

②以上の研究成果を関連する中国の学会で発表して中国の美学者・音楽学者の意見を聞くと共に、日中の古典文学に見られる音感覚に関してどのような点に両者の根本的な差異があるかを把握する。

③最終年度（平成 21 年度）に本研究上作成した資料、および本研究に関連する自著論文を収録した研究成果報告書を刊行する。

2. 研究の進捗状況

(1) 虚構であるにもかかわらず「源氏物語」においては、当時の衣装に対応する描写が見られるように、音楽に関する確かな記述がなされているが、音楽とある種の自然音（風の音、鳥の鳴き声等）の共存（響応）は作者紫式部の想像力において成立し得た諸感覚の融合の一つの形態であり、言葉からの連想、本歌取り、故事等にもとづく文

芸的美意識に支えられていることを解明した。

(2) ①芭蕉「奥の細道」が「序」（出発から遊行柳まで）、「破」（白河の関から象瀧まで）、「急」（鼠の関から大垣まで）という伝統音楽の構成法によっていることを指摘した。

②「奥の細道」の中核部分（松島—酒田）の主要地点を 3 年間に亘って実地調査して地理的環境を確認し、芭蕉の時代の聴覚世界を推測する手掛りを得た。

③曾良日記との不整合から「奥の細道」がいわゆる紀行文ではなく東北旅行に重ね合わせられた芭蕉の想像力による文芸作品であることは専門家によって指摘されているが、音感覚と関わりのある俳句、記述も現実の情景描写ではなく情景あるいは歌枕によって触発された想像力の産物であることを解明した。

④芭蕉の全発句（推敲を重ねたものは最終稿に限定）において詠み込まれている自然現象の音としては、雨の音（「時雨」、「五月雨」等）が 45 例、風の音（「秋の風」、「こがらし」等）が 40 例と群を抜いて多く、生きものの発する音としてはホトトギスが 27 例と際立って多いことが調査を通じて判明した。

(3) ①虫の鳴き声に関しては、既に「万葉集」のうちに詠み込まれたものが散見されるが、中世になると日本各地を遍歴し草庵生活を営んだ西行によって数多く和歌に詠み込まれていることを「山家集」の調査を通じて確認した。

②自然音に対する音感覚を中国の場合と比較すると、顕著な違いのあるもの（例えば

中国中世以後のコオロギ)の存することか研究を通じて明らかになり始めた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。<理由>「源氏物語」、芭蕉全発句および「奥の細道」を中心とする文芸作品、およびこれらに関連する文芸作品にみられる音感覚に関する記述を調べ上げて分析すると共に、その歴史的背景にも遡及しつつある。中国の伝説・古典にみられる音感覚に関する記述と比較研究して行く糸口を見つけることができた。

4. 今後の研究の推進方策

「源氏物語」、芭蕉全発句を調査して得られた音感覚に関する記述を整理して資料化し、本研究の発端となった論文(「音楽と自然」1982)の中国語訳、および本研究から生まれた論文等と併せて研究成果報告書として刊行する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3件)

原正幸、スコラ・ピロム・ソールム第II部 音楽少年アイヌーシュの修行 第4章~第6章、芸道思想の現代的意義について(科学研究費補助金・基盤研究(B)15320023 研究成果報告書)、査読無、44-60、2009年、44-60。

原正幸、「音楽を通じての男女(夫婦)再会譚」の起原、世界肯定の論理と技法(科学研究費補助金・基盤研究(B)16320006 研究成果報告書)、査読無、2008年、93-101[*下記論文の修正加筆版]。

原正幸、「音楽を通じての男女(夫婦)再会譚」の起原—山田流箏曲「小督」を例にして—、第7届中日音楽比較国際学術研究会論文集(武漢音楽学院)、査読有、2007年、361-365。

[学会発表](計 1件)

原正幸、通過音楽重逢情人(愛人)故事の源流—以日本山田流箏曲「小督」為例—、第7届中日音楽比較国際学術研究会、2007年9月6日、中国湖北省武漢音楽学院。

[図書](計 1件)

原正幸、広大生協*、スコラ・ピロム・ソールム第II部 音楽少年アイヌーシュの修行、2009年、89ページ[*私家版教科書]。